霧のなかの声

島村利正

新潮社版

霧のなかの声

島村利正

新潮社版

霧のなかの声

昭和五十七年三月十五日　印刷
昭和五十七年三月二十日　発行

定価　一三〇〇円

著者　島村利正

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

〒162　東京都新宿区矢来町七一
電話東京（〇三）二六六一五一一一　業務部
（〇三）二六六一五四一一　編集部
振替　東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷　株式会社　金羊社　製本　株式会社　大進堂

© Tatsuko Shimamura 1982 Printed in Japan

霧のなかの声　目次

霧のなかの声……7
蜃気楼……85
*
会津晩秋……113
斑鳩ゆき……131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

くちなわ幻想……155
青い雉……173
伯耆大山……195
宝冠……217

装画　星　襄一

霧のなかの声

霧のなかの声

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

一

この山岳が、花崗岩の山としては、日本でいちばん高いと云われている。雲のなかに突きささった峯々、ふかい谷、断崖絶壁。すこし黄色を帯びた黒雲母花崗岩の巨大な山脈である。二十五座の高峰と、八千の谷から形成されているという。主峰の駒ヶ岳は、海抜二千九百五十六メートル、近くの、鋭く屹立する宝剣岳は二千九百三十三メートル。……

発電所のかたわらでタクシーを降りる。開鑿道を一キロほど歩くことにする。その辺が一、二合目になるようだ。起点から歩きたかった。あたりはまだ薄暗い。熊笹の山肌から朝の風がながれてくる。ふり返ると、伊那谷のはるか向うに、東の南アルプス連峰が、曙光をうしろに背負って、暗紫色の威容をいっそう濃くしている。下方の山並はひくくたれこめた白雲のなかに塗りこめられている。久我は昨夜の伊那市泊りの宿でも思ったように、花崗岩のこの山岳の特徴を、ふとまた、胸のなかで云ってみたりした。

秩父の雲取山が、久我の山への病みつきになった。三年前の高校二年のときである。山好きの若い教師がいて、七、八名でのぼった。その後、赤城山や丹沢山にもいったが、谷川岳は遭難が多く、父親がどうしても許してくれなかった。大学一年のときに、岐阜県生れの芹田駿二と知合った。文京区の根津に家のある久我は、地方出身の同窓生に興味を持った。芹田が新品のピッケルを持って教室にはいってきたとき、はじめて言葉を交した。芹田は血色のいい、黒眼の澄んだ、いかにも山家育ちらしい骨格のしまった顔をしていた。久我は両親に似たのか色が白かった。

久我も芹田も経済学部であったが、芹田は親が許せば文学部へゆきたかったようだ。久我は兄弟のいないひとりっ子であったが、芹田は四人兄弟の二男だという。芹田と一緒に山へゆくようになって、本格的な装備や山の勉強もした。芹田は郷里での高校時代から山歩きには馴れて、乗鞍、穂高をはじめ、多くの山にのぼっていた。

「おれの家は、飛騨の益田川に近い山奥なんだ。高校時代からひとりで山にのぼるのが好きだった。大学の山岳部にはいれば本格的な登山家になるのだろうが、山育ちのおれは、群れて歩く、あの登山家というのが、なんとなく好きになれないんだ」

芹田は、この言葉の調子とちょっと違って、動きや物腰に、練れた、大人の感じがある。久我も山岳部にははいらなかった。しかし芹田は、駈出しの山岳部員より、はるかにふかい山の知識があった。ふたりで雲取山を二回やり、次に信州の八ヶ岳、こんどははじめての中央アル

プスであった。

昭和三十九年の夏のことである。駒ヶ根市から頂上近くまでのぼるロープウェイはまだ出来ていなかった。

熊笹の道ののぼりに、動物の糞が落ちている。

「カモシカのものじゃない。これは、蹴飛ばしたりしちゃいけない。あとからのぼってくる連中に、熊か何か、相当な動物のいることを知らせるためだ」

久我はなるほどと思い、あたりを見廻した。道はもうちりめん坂というのにかかっていた。唐松林と熊笹がだんだんふかくなる。芹田は角笛を取り出すと、高くひくく、尾をひくように鳴らした。よく使いこんだ、尖ったカモシカの角笛であった。むかしから家にあったものだという。猟に使ったものかも知れない。

あたりが次第に明るくなり、南アルプスからの陽の出が近い。久我がいつものように先頭であった。芹田がうしろから見護るように、三メートルの間隔で跟いてくる。八ヶ岳のときもそうだった。リュックの重量は相当なものであったが、登山靴の重厚さが、それをガッシリと支えてくれる。久我は大地を確っかりと踏んでゆくこの感じが好きだった。ウオルター・ウェストンが、友人のベルチャートとともに木曾の上松から駒ヶ岳にのぼり、伊那谷側の伊那町に下山したのは明治二十四年八月十二日だという。北アルプスより先きに、駒ヶ岳と木曾の御岳山にのぼっている。芹田が貸してくれたウェストンの「日本アルプスの登山と探険」で、久我は

そのことも教えられた。
　ちりめん坂の頭に出たとき、陽がのぼってきた。下方の伊那谷はまだ眠っているようだ。上方に眺められる将棊頭（しょうぎがしら）とよばれる二千七百二十七メートルの峯は、朝日を受けて、這松（はいまつ）と岩が黄金色に輝いている。だが、そこまでは、胸突き八丁をふくむ二時間近いのぼりがある。水場で口をすすぎ、山の水を飲む。水筒は大丈夫だ。水場はあと一ヵ所しかないという。
　ふかい樹林のなかを一時間ほどのぼる。馬返しから大樽小屋。そこから一時間余の胸突き八丁、文字通りの急坂になる。大樹の枝が交叉して空も見えない。
「おい、久我、熊じゃない、人間がいるぞ」
　うしろから声がかかった。こののぼりには弘法石とか光苔（ひかりごけ）という見場所もある。大樹の根をまわる急坂に四、五人のパーティが休んでいる。女の子もふたりほどいる。
「ひと憩みですか」
　久我が声をかけてかたわらをあがる。久我たちと同じ大学のひともいるようだ。女の子も帽子の小さいバッジからそれとわかる。ふたりとも濃い口紅をつけている。それほどバテてはいない様子だ。百メートルほどのぼったところで、こんどはうしろからきた三人組に抜かれる。すごい脚力だ。
「お先きにごめんよ」
　本格的な玄人のパーティのようだ。装備や足はこびを見て久我はそう思った。

「あれは体力テストをやっているのかな。この胸突き八丁を、あんな風にのぼっても意味はないよ。急坂には負けて勝て、という言葉もあるんだ」

芹田がうしろで云った。這松地帯にようやくかかる。それを抜け出ると胸突きの頭で、はじめての分水嶺である。眼の前に、木曾谷を越えて、御岳山の三千六十三メートルが、雲のなかから上半身を見せている。肩をぐいっと張っているような剛さがある。ふり返ると、南アルプス連峰が、はるか南まで一列にならんで胸を圧してくる。伊那谷を掩(おお)っていた白雲はすっかり消えて、ふかい緑が無数の山襞を刻んでいる。

「あれが馬の背道だ。その向うが本岳(ほんだけ)になるのだろう。木曾谷と伊那谷は、同じ谷でも随分違うんだな」

芹田もこの岳(やま)ははじめてであったが、岳の様子はよく研究していた。最初の山小屋、西駒山荘に寄り、将棊の頭を踏んで、そのまま峯つづきの岩場道をたどる。雨水を溜める天水岩、近くに、大正二年八月に遭難した伊那谷、中箕輪小学校長、生徒等の遭難記念碑がある。大きな花崗岩の碑だ。

「この辺が八合目かな、二千七百ぐらいだろう」

岩は多かったが、その間を縫う砂礫道は歩きよかった。久我はそろそろ飯かな、と思った。時間は十時をすぎている。朝飯が早かったから当然のことだ。ふたりは顔を見合わすと、痩せ尾根の馬の背道と、左への濃ヶ池カールへの岐れ道の手前でリュックをおろした。

「木曾谷と伊那谷が一望だ。南アルプスの上に富士が見えるぞ」
芹田が云った。久我は木曾谷のほうに軀をまわし、
「あの御岳の向うに、芹田の故郷も見えるんじゃないのか」
「うん、乗鞍の左の鞍部が野麦峠になると思うんだが、雲がかかっている。あの辺のずっと奥さ。おれの故郷は遠いよ。兄貴が二、三日前、十万円送ってくれた」
芹田の父親は五年前に死んで、母親と兄夫婦、そして、妹と弟が高校と中学に在学中、兄は岐阜の大学を出て、町役場に勤め課長になっているという。
ふたりは足を投げ出して宿の握り飯を頬張った。味噌を塗ってかるく焼いてある。なかに梅干しがはいっている。芹田の注文であった。
「霧がふかいときに、梅干しの種を投げると道があく。……おれの郷里のひともそう云うんだが、それは嘘のようだな。この酸っぱさが喉の渇きを医し、高山病に罹りそうな気持に活を入れる。ほんとうは、それを云うんだろう」
久我はそのとき、母親のことを、いや、父のことを思い出していた。芹田の言葉に誘い出されたようだ。何種類もの佃煮を小ぶりの蓋ものに詰めてくれたのは母であった。
「おい、これを持ってゆけよ」
と、水蜜桃の罐詰を、無造作にリュックにほうりこんでくれたのは父であった。リュックの重量を計算している久我は、こんな重いものを、と思ったが、黙っていた。家を出るときに、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.